

主イエス・キリストよ、おいでください

— 聖餐式の祈りを味わう —

北陸伝道区霊交会 2025 年 7 月 20 日 福井聖三一教会

司祭 ヨハネ 井田 泉

♪聖歌 248 (くしき力 今あらわる)

1. はじめに

- ・わたしたちの信仰生活にとって、礼拝ことに聖餐式はどういう意味を持っているだろうか？ 信仰と生活の力の源泉か、習慣か？
- ・今日は聖餐式の中からいくつかの祈りに注目し、それを深め味わってみたい。聖餐式全体については、別冊「聖餐式の言葉から」を参照してほしい。

・聖餐式の個人的な経験から

①金沢聖ヨハネ教会にて (1979 年？夏)

今から 45 年ほど前の夏、最初の赴任地の下鴨キリスト教会から休みをいただいて、京都から夜行列車に乗って主日の早朝、金沢駅に到着した。ところがそこで体調が悪くなり、タクシーに乗って金沢聖ヨハネ教会に倒れ込んだ。当時の牧師は宮岸進司祭。しばらく休ませてもらって、遅れて途中から聖餐式に出た。聖餐を受けたとき、とても力が与えられて、嘘のように回復した。聖餐ないし聖餐式の恵みがいかに大きいかを経験した忘れられない思い出の一つである。

②司祭按手 (1979 年)

自分で聖餐式を司式するようになって、とても緊張した。けれどもそれ以上に、非常に大きな恵み（神の臨在）を聖餐式ごとに経験するようになった。昔ヤコブが家を離れて遠く旅をしたとき、石を枕に野宿をした。そのとき、夢に天使が天に至る階段を上り降りするのを見た。眠りから覚めて彼は畏れつつ言った。

「まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった」(創世記 28:16)。

- ・わたしにとっての司祭職（教会・幼稚園・大学・神学校、退職後を含め、按手から今に至るまで 46 年近くのすべての働き）の中心は、今に至るまで聖餐式の司式・説教であったし、これからも許されるかぎりはそうでありたい。

○ここから聖餐式文の祈りをいくつか取り上げる。すべてを網羅することはできないが、「祈願」「賛美」「懺悔」「感謝」の 4 つを順に見ていこう。

2. 祈願 <祈り 1>

(1) 主イエス・キリストよ、おいでください（参入）

- ・現行聖餐式の本文は、司祭がこの祈りをすることから始まる。

イエス・キリストが来てくださらなければ（主の臨在がなければ）、礼拝は無意味。
主イエス・キリストと出会い、この方と交わる（この方に呼びかけ自分を差し出し、
またこの方から語りかけられ、その命をいただく）ことが礼拝の意味であり目的。
心をこめて主を呼ぼう。

- ・この祈り求めは、新約聖書に出てくる重要な言葉でもある。

「マラナ・タ μαράνα θά（主よ、来てください）」コリント I 16:22

（パウロの祈り）

これは アラム語をギリシア文字に転記したもの。

Μαράνα=Our Lord! Θά=Come!

「アーメン、主イエスよ、来てください」ヨハネの黙示録 22:20

Αμήν, ἔρχου κύριε Ἰησοῦ

（聖書全体の締めくくりの言葉。最後から二つ目の節）

- ・けれども、わたしたちがイエスを呼ぶだけではない。聖餐式において、実は主イエスが先に食卓の準備をして、わたしたちを招いていてくださる。この両方が大切。

(2) キリエ・エレイソン（主よ、憐れみをお与えください）

キュリエ エレエーソン

κύριε, ἐλέησόν

- ・新約聖書は、当時の地中海世界共通語であるギリシア語で書かれた。新約聖書に含まれるギリシア語の祈り求めの言葉が、わたしたちの聖餐式にまで継承されてきた。

「^{キリエ}主よ、^{エレエーソン}息子を憐れんでください」

イエスにこう訴えたのは、発作の病に苦しむ息子をかかえた父親だった（マタイ 17:15）。

またエリコの盲人バルティマイは、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と叫び求めた。イエスは立ち止まり、彼を呼ばれた。彼は見えるようにされてイエスに従った。（マルコ 10:46-52）。

「イエスは、群衆が飼主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く（彼らを）憐れまれた。」マタイ9:36

ἐσπλαγχνίσθη περὶ αὐτῶν

“σπλαγχνίζομαι”（ギリシア語「スプラクニゾマイ」）は内臓が圧迫されるような共感共苦を示す激しい切なる言葉。

- ・ 聖餐式の中で、わたしたちも自分の困難や願い、人の困難や願いを携えて、キリエ・エレイソン（主よ、憐れみをお与えください）と主に切に祈り求めよう。

（現在進行中の祈祷書改正案では「憐れみ」を「いつくしみ」に変えようとしている。人間と世界の悲惨の現実からの切実な祈り求めを薄めてしまわないか。）

3. 賛美 <祈り2>

- ・ わたしたちの祈りに「賛美」がどの程度あるだろうか。神の愛と救いの業に触れて賛美が起こる。また賛美の回復は、神の業の再発見をもたらす。
- ・ 詩編 150 編では、全 6 節の中に 13 回「ハレル（ヤ）」הַלְלוּ יְיָ（主を〔神を〕賛美せよ）が繰り返される。神への賛美は非常に大切にされてきた。
- ・ 神への賛美は、現実への束縛からわたしたちを解放し、神の支えの中で新しく現実に取り組む力を与える。

(1) 大栄光の歌

「いと高きところには神に栄光、地にはみ心にかなう人びとに平和がありますように。
……主の栄光をほめたたえます。……最も高くおられます アーメン」

- ・ ベツレヘムの羊飼いたちが聞いた天使の賛美の合唱にわたしたちも加わる。わたしたちは狭い自分の世界から抜け出て、天使たちと一緒に神を賛美する。
- ・ 大栄光の歌の後半は焦点が「イエス・キリスト」に移り、この方への祈願と賛美で閉じられる。
- ・ 天使の合唱を聞いた羊飼いたちが、急いで幼子を探しに出かけたように、わたしたちも救い主を求め、その方との生きた出会いに近づいていく。聖餐式の中でそれをわたしたちは経験していく。

聖餐式の流れでは、この後に「特祷」がささげられ、み言葉に進む。今回は「**み言葉**」（聖書と説教）について立ち入る余裕がない。ただ二つのことに注目しておきたい。

①わたしたちの祈祷書の大本（起源）は英国の The Book of Common Prayer（1549 第一祈祷書）である。この編集に当たった当時のカンタベリー主教トマス・克蘭マーは「祈祷書のへの序文」でこう書いている。

「人々は（毎日教会で聖書を聞くことにより）常に神を知ることにおいてより大きな利益を得て、神の真の宗教に対する愛をいっそう燃え立たせるべきである。」

And further, that the people, by daily hearing of holy Scripture read in the church, should continually profit more and more in the knowledge of God, and be the more inflamed with the love of his true religion.

- ・聖公会は礼拝の大改革から始まった。意味のわからないラテン語のミサに代えて、英語による礼拝が整えられた。特に、聖書の言葉が人々の心に届き、それを燃え立たせることを願って、最初の祈祷書が編集されたことを忘れてはならない。

②マルコ福音書にはイエスの話を聞く人々の姿と気持ちがこう記されている。

「大勢の群衆は、イエスの教えに喜んで耳を傾けた。」 12:37

このようなことが、わずかでも今日のわたしたちの礼拝の説教に起こってほしい。

（2）ニケヤ信経

- ・キリスト教信仰のエッセンス。わたしたちはこれを信じて生きている。
- ・神に対してわたしたちの信仰を告白する。これを神への賛美として唱えたい。
- ・神の救いの業を一つひとつ確認し賛美する。一句一句の中に神の救いの業が凝縮している。心をこめて丁寧に唱えれば、神の愛に具体的に触れて喜びと感動が与えられる。

4. 懺悔（罪の告白） ＜（祈り 3）＞

- ・わたしたちは個人的な、あるいは共同的な大小の過ちによって、自分の中に負い目を抱え、神との間に壁を作ってしまう。これは人間である以上は避けられない。
- ・わたし（たち）の罪、過ち、葛藤、嘆きを神の前にさらけ出す（懺悔・告白）ことは、「心を見られる」（サムエル記上 16:7）神との間の関係を回復すること。
- ・わたしたちの懺悔が真心からのものであって、司祭の執り成しの祈りとともに聖霊が働くなら、そこに神の赦しが現実にかかる。神の赦しの愛がわたしたちを清め、命を吹き込み、わたしたちは新しくされる。
- ・ディートリッヒ・ボンヘッファーは「罪の告白は教会の中にキリストが突入してくださること」だと言っている（『現代キリスト教倫理』）。懺悔はイエス・キリストの恵みを具体的に受けること。

- ・礼拝の始まる前に、何が自分の過ちであるかを心に確かめておく。一般的な懺悔の言葉の中に具体的な事柄を込めることによって、赦しを具体的に経験するようになる。

5. 感謝 <祈り 4>

- ・「感謝」という言葉は聖餐式文の中で「大栄光の歌」「福音書」朗読後、「感謝聖別」に出てくる。
- ・特に「感謝聖別」において、わたしたちは主イエスの最後の晩餐を記念し、再現する。主イエスが最後の食卓において「パンを取り、感謝してこれを裂」かれたこと、「杯を取り、感謝して」罪の赦しを得させるための契約の血について語り、聖餐を制定してくださったことを大切に記憶したい。イエスご自身が感謝の祈りをささげられた。
- ・わたしたちの感謝は聖餐を受けたことによって絶頂に達する。
「この聖餐にあずかった者を、み子イエス・キリストの尊い体と血をもって、養ってくださることを感謝します。」
- ・この感謝を心からささげるために、陪餐とその後の沈黙の時を大切にしたい。主イエスの愛の命は、わたしの心と体のすみずみにまで浸透することを感じたい。その愛の命は、会衆（祈りの群れ）全体にも浸透する。こうしてわたしたちは、個人としても共同体としても元気づけられる。主イエスの命を受けることはうれしい！ことである。

6. 黙想・沈黙・静けさ silence ——礼拝全体におけるその大切さ

- ・「黙想」「黙祷」については式文ルブリックで、聖書朗読後、代祷、感謝聖別の後（主の祈りの前）に言及されている。しかしあまり意識されていないのではないか。

「静けさ（沈黙）は、典礼的礼拝において不可欠な要素です。なぜなら、それは私たちに、思い巡らし、祈り、個人的な嘆願や賛美をささげる機会を与えてくれるからであり、何よりも神の御前にいるための時間だからです。静けさは決して、時間の無駄や、礼拝に余分に加えられたものと見なされるべきではありません。静けさは典礼のさまざまな段階を区切るものであり、上記のような目的のための時間を提供します。」

Dennis G. Michno, *A Priest's Handbook: The Ceremonies of the Church*, 1998

（著者はアメリカ聖公会の司祭）

- ・具体的には例えば——礼拝の前／特祷の前（「祈りましょう」の後）／聖書朗読の後／懺悔の前／代祷の後／感謝聖別の後・主の祈りの前／陪餐後の感謝の前

- ・ 礼拝の開始前にその場が祈りの空気になっているかどうかは、その礼拝の質を大きく左右する。

「主はその聖なる神殿におられる。全地よ、御前に沈黙せよ。」ハバクク書 2:20
文語の祈祷書、「早祷序式」「晚祷序式」の冒頭にはこの聖句があった。

「主はその聖なる宮にましませり、全地その御前に黙すべし」

- ・ 礼拝全体を言葉と声で埋め尽くすのではなく、神（聖霊）が働かれる余地を空ける。
たとえ数秒でも沈黙の静けさは大きな意味を持つ。

7. 聖霊の働き

- ・ 礼拝が神を経験する生きた出来事となるか、それとも形だけの儀式になるかは、神ご自身の臨在と働きにかかっている。わたしたちの間に臨在し働かれる神を、聖書は「**聖霊**」と呼ぶ。
 - ・ 聖餐式文に「**聖霊**」がどのように出てくるかを確かめてみよう。
- (1) 「どうか**聖霊によってわたしたちの心を清め、まことに主を愛して**」（清めの祈り）
聖霊こそがわたしたちの心を清め、主を心から愛させてくださる。
 - (2) 「主は……**聖霊によっておとめマリヤから肉体を受け**」ニケヤ信経
救い主の降誕は聖霊なくしてはあり得なかった。
 - (3) 「また、主なる**聖霊を信じます。聖霊は命の与え主**」ニケヤ信経
聖霊は礼拝に命と喜びを与え、わたしたちの信仰と生活を力づけ導く。
 - (4) 「あなたの賜物であるこのパンとぶどう酒の上に**聖霊を送り**、これをわたしたちのためにみ子イエス・キリストの体と血にしてください。」感謝聖別Ⅱ
人間の営みの実りであるパンとぶどう酒がイエス・キリストの体と血となってわたしたちを生かすのは、聖霊の働きによる。司式者が魔法を使うわけではない。
 - (5) 「どうか、**聖霊によってわたしたちをこの世に遣わし、み旨を行う者とならせてください。**」 陪餐後
聖霊によってこそ、わたしたちはこの世において神のみ旨を行うようにされる。
- ・ 教会を誕生させたのは聖霊降臨。主イエスの約束を信じて聖霊を待ち望んでいた祈りの群れに聖霊が激しく注がれた（使徒言行録 2:1-4）。
 - ・ 聖霊の働きによってこそ、礼拝は生きたものとなる。聖霊について聖書から深く学

び、聖霊を祈り求め、経験していこう。

・韓国のチャン・ジェギ牧師の「礼拝のための祈り」から（一部）

「わたしたちの礼拝を受けてくださる聖三位一体の神よ、
今日、わたしたちの礼拝が
聖霊なる神の栄光に満ちた臨在がある礼拝、
み子イエスにまったく集中する礼拝、
父なる神のみを心からあがめる礼拝となることを願います。
心を尽くして礼拝し、十字架にすがって礼拝することを願います。
神よ、礼拝のうちに訪ねて来てくださり、出会ってくださり、
栄光をお受けください。

……

生きておられる聖霊よ、
わたしたちの礼拝のうちにおいでください。
おいでくださってわたしたちを治め、自由に動き、働いてください。
霊なる神が満ち溢れて、
神の霊によって完全に覆ってくださる礼拝、
聖霊なる神が願われるがままに働かれる礼拝となるようにしてください。」

8. おわりに——生きた喜びのある礼拝のために

(1) 備えを大切に

(2) テンポと間 心をこめて祈れるように

それで祈れているか？ 言葉を急いで唱えているだけになっていないか？
司式者の役割・責任が大きい。しかし会衆の自覚的参加も非常に大切。

(3) 心と声を合わせる（一緒に祈る）

(4) 「呼びかけと応答」から生まれる力と一体感

司祭 主は皆さんとともに
会衆 また、あなたとともに
……

執事または司祭 ハレルヤ、主とともに行きましょう
会衆 ハレルヤ、主のみ名によって アーメン

(5) 聖霊の臨在

- ・ヨハネの黙示録から「ラオディキアにある教会に語りかける主の言葉」

「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう。」 3:20

主イエスはわたしたちと一緒に食事をしたい、聖餐を分かち合いたい、ご自身のいのちを提供したいと願って、戸を叩いておられる。この方を迎え入れ、ともに聖餐の恵みにあずかろう。

♪聖歌 396（わたしたちは 一つ）

「主の霊に導かれ……」